



2-4 「フレーバーあれこれ」という題で奥山先生の最も古いお弟子さんのお1人堀江肇さんにお話して頂きました。長年香料業界で実務に携わられ現在も香料研究家としてご活躍中の堀江さんのお話は香りという身近な話題であることもあり、質問・討論が活発で予定時間を超えて楽しいお話となりました。

＊ ＊

＊ ＊

＊ ＊

### 3) 第68回定例会のおしらせ。

\*\*\*\*\*

#### バイオテクノロジー標準化支援協会 第68回 定例会

\*\*\*\*\*

日時：2015年10月23日(金)14時00分 - 16時00分

参加費：無料

\* (定例会は会員でも会員でなくても自由に出席して、自由に発言も出来ます。)

友人同士誘い合わせてご出席ください。出席するのが面倒な方はメールでご意見をお寄せください。

場所：八雲クラブ（ニュー渋谷コーポラス 10階-1001号）（首都大学東京同窓会）  
（渋谷駅から坂（井の頭通り）を上がり東急ハンズの角を右に回り、直ぐまた右に曲がるとハンズの搬入口でその隣の建物です）

住所：渋谷区宇田川町12-3 電話番号：03-3770-2214



八雲クラブ案内図：地図はグーグルマップで、赤い丸印の場所です。

## 話題

### \*1 奥山典生先生追悼文の紹介

#### 1) 大島輝夫様より

協会ジャーナル毎号お送り頂き有難うございます。

奥山典生先生が亡くなりました由、謹んでお悔やみ申し上げます。

私は奥山典生先生と大阪大学理学部化学科昭和27年卒業の同級生ですが、亡くなられたことは初めて知りました。

10月7日大阪で同期会がありますので、そのとき奥山先生を偲びたく存じます。

奥山先生から協会ジャーナルをお送り戴き、私も時々出席し、皆様のお話を伺っていました。

奥山先生は旧制大阪高等学校の出身で、大高出身の方が同期に大勢いました。

その当時、恩師の赤堀教授は後に東大理学部に移られ、同期で大学に残られた方の中には、東大理学部生物化学の教授になった、岡田吉美、大阪大学理学部化学の教授の花房照静がいました。

10月7日の同期会には、花房も出席します。

大島輝夫

#### 2) 檜山哲夫氏より

私と奥山先生

私が奥山先生と初めてお会いしたのは1996年頃だったと思う。

「バイオ分野の分析技術と機器—最近の動向についての調査」という通産省のプロジェクトを私の研究室で学位をとられた千田正昭さん(当時分析機器工業会に日本分光から出向していた)が取って来たとき、私もお手伝いすることになった。そのとき委員長を引き受けて下さったのが奥山典生先生である。クロマトグラフィー関係では有名な技術者である千田さんがその関係で永年先生とお付き合いがあった関係である。私は名前だけの副委員長として報告書をまとめただけで全て奥山先生と千田さんがプロジェクトを進めた。この通産省プロジェクトは1997年には報告としてまとめ(ぶんせき 12: 1029-1030 (1997))、委員会は解散した。

実は奥山先生のお名前は1960年代私がまだ大学院の学生だった頃から存じ上げてはいた。日本生化学会や酵素化学シンポジウムなど私が当時必ず出ている学会でいつも目にしていたお名前だったからである。私も先生と同じ生化学分野に身を置いていたわけだが、なにしろ生化学会は当時から巨大な学会でいろいろな分野があり、乳酸菌の酵素しかやってなかった私が先生と一緒にすることはなかったんだと思う。だから、先生のお名前はしょっちゅう拝見してはいたが、お顔

を知る機会はなかったのである。

実際お会いしてお話をしているうちお互い別々に知っている昔の研究者たちの名前から始まり、クロマトや電気泳動や「生化学分野の分析」という共通のフィールドがあることも分ってきた。

このプロジェクトのお陰で私はそれ以来年3回ある工業会の懇親会に招んで頂いているのだが、そこで必ずお会いするのが奥山先生だった。だから1997年以来毎年3回は先生にお会いしていたことになる。いつだったかその会で先生から「今、生化学の標準化に取り組んでいる」という話を伺った。私は、生化学や分子生物学のような日進月歩の分野での標準化は難しいだろうなどと生意気なことを申し上げたのを覚えている。

その後毎度お会いするたびにその話をされる。そのたびに先生の博識に感心するものの余り真面目に考えなかった。2004年に私も25年勤めた埼玉大学を定年退官し少し暇ができたころ、先生からジャーナルを転送頂き初めてこのバイオテクノロジー標準化支援協会(以下SABSと略す)の会合に出た。そのときのNo.011のジャーナルが私の手元にある。あの分かりにくい八雲クラブによく独りでたどり着けたと思うが多分千田さんが連れていってくれたのではないかと思う。それ以来かなり真面目にほとんど毎回出たせいかな翌年の秋には理事にして頂いてしまった。「名前だけで何もなくていい」とおっしゃっていたと勝手に思って本当に何もなかった。実は何かお手伝いしたいとは思っていたのだが、あの非常に広い人脈、豊富な経験と学識をお持ちの奥山先生のお手伝いは何ができるだろうか、どうしたらいいのか等と考えているうち月日が経ってしまった。

今年も1/14の工業会新年会に始まり、1/23、2/27、3/27のSABS例会で先生の相変わらずお元気な独演を聞かせて頂いていたのだが、4月の例会(24日)は、たまたま私は幕張メッセに居なければならぬ用事があり欠席せざるを得ず、先生にはその旨メールでお伝えした。次にお会いしたのは5/13の工業会懇親会だった。そこで私は4月の例会に出られなかったお詫びを申し上げたのだが、先生はニコニコと「次の例会(5/22)には話題提供して下さい」とおっしゃっただけだった。「話題」の要旨をお送りしなければと思いつつモタモタしているうち、SABSジャーナルNo.073(発行日が2015年5月17日(日)となっている)が私のところに届いてしまった。5/22の例会予告だったのだが、そこには、私の欠席した前回の例会(4/24)に奥山先生も欠席されていたことが記されており、びっくり。さらに数日後には荒尾さんからメールがあり、先生が5/19首都大学訪問中に倒れられ緊急入院されたとのこと。急遽5/22は緊急理事会となり、そこでは先生の一日も早いご回復を祈りながら今後のことを話し合うこととなってしまった。

その後の経緯は6/19発行のSABSジャーナルNo.074に記した通りである。思えば、5/13の工業会懇親会が私の先生にお会いした最後だった。霞が関ビル36階であったパーティーのあと、私は1階のバーで千田さんといつも二人でやるささやかな2次会をやっていた。その時ガラス越しに見えたお帰りに先生の後ろ姿を見たと言いたいところだが、実は千田さんに言われて振り返って見たとき既に先生のお姿はなかった。それからわずか4、5日後に倒れられたことになる。荒尾さんのお話では、私も欠席した4/24の例会のとき先生は丹毒で入院されていて、今考えるとご退院後まもなくあの日霞が関ビルに来られたことになる。お元気そうだなと勝手に考えていたのだがご病状は進んでいたのかもと考えると余計悔やまれる。

私と先生は、師弟関係や同僚ではなく、また研究ライバルでもなく、利害関係もないという関係で

あった。私にとって先生は生化学という非常に広い分野の大先達であった。生化学屋には博識を誇る人が多いのだが先生は理学部出身なのに大学院は医学部の研究室に居られたこともあり、特に実学的な博識は図抜けて居られた。お陰で非常に多くのことを先生に教えて頂いた。生意気にも反論を試みたことも多々あったがいつもの確にお答えいただき私の知識が訂正されたり広がったり大変な勉強ができたのだった。そして、もはや先生の警咳に接することは出来ないのは誠に残念である。

標準化と雑誌「医学と生物学」の復刊という先生の残されたお仕事を微力ながら皆様とともにしっかりと続けていくことをお誓いして深くご冥福をお祈り申し上げます。

2015年10月

檜山哲夫

## \*2 工業標準化について 田坂 勝芳 氏

### ●工業標準化について

田坂勝芳

標準化 (Standardization) とは、「自由に放置すれば、多様化、複雑化、無秩序化する事柄を少数化、単純化、秩序化すること」ということができます。また、標準 (=規格: Standards) は、標準化によって制定される「取決め」と定義できます。標準には、強制的なものや任意のものがありますが、一般的には任意のものを「標準 (=規格)」と呼んでいます。

したがって、工業標準化とは、工業分野における標準化のことであり、我が国では、国が定める工業標準として日本工業規格 (JIS) が制定されています。

工業標準化の意義は、具体的には、自由に放置すれば、多様化、複雑化、無秩序化してしまう「もの」や「事柄」について、経済・社会活動の利便性の確保 (互換性の確保等)、生産の効率化 (品種削減を通じての量産化等)、公正性を確保 (消費者の利益の確保、取引の単純化等)、技術進歩の促進 (新しい知識の創造や新技術の開発・普及の支援等)、安全や健康の保持、環境の保全等のそれぞれの観点から、技術文書として国レベルの「規格」を制定し、これを全国的に「統一」又は「単純化」することであると言えます。

これら工業標準化の意義を「規格」の機能 (働き,作用) に着目して整理すれば、次のように説明することができます。

#### (1) 経済活動に資する機能

1. 製品の適切な品質の設定
2. 製品情報の提供
3. 技術の普及

4. 生産効率の向上
  5. 競争環境の整備
  6. 互換性・インターフェースの整合性の確保
- (2) 社会的目標の達成手段としての機能
  - (3) 相互理解を促進する行動ルールとしての機能
  - (4) 貿易促進としての機能

## ●国際標準化機構

国際標準化機構（こくさいひょうじゅんかきこう、International Organization for Standardization、略称: ISO（イソ、アイソ、ISO アイエスオー））は、電気分野を除く工業分野の国際的な標準である国際規格を策定するための非政府組織。スイスジュネーヴに本部を置き、スイス民法による非営利法人である。公用語は英語・フランス語・ロシア語。各国1機関が参加できる。国際標準化機構が出版した国際規格（IS）もISOと呼んでいる。

国際規格を支える仕組みとしては、メートル条約に基づく国際単位系(SI)と、国家計量標準の同等性の承認及び校正証明書を相互に承認する仕組みがある。相互承認は、「計測及び計量標準の分野における協力に関する日本国通商産業省工業技術院（AIST）とアメリカ合衆国商務省国立標準技術研究所（NIST）との間の実施取決め」のように二国間での取り決めがある。また WTO/TBT 協定は、規制・規格が各国で異なると、製品の国際貿易の技術的障害(Technical Barriers to Trade)を、できるだけなくそうとするために国際規格を尊重することを規定している。この2つの国際的な取り決めが、国際標準化機構の存在根拠となっている。

＊ ＊

＊ ＊

＊ ＊

- 4) ホームページに e-library のリストがあります。会員の方はその中から希望のものをご指摘ください。

バイオテクノロジー標準化支援協会からジャーナルをお届けします。

- ① 配信停止・中止希望；返信にしてその旨お知らせください。
- ② 配信先等、登録情報変更希望； 返信にしてその旨お知らせください。
- ③ バイオテクノロジー標準化支援協会に新規会員登録を希望；返信にして、その旨記載してください。または入会希望書に必要事項を記載の上 FAX 送信ください。詳細確認希望の場合はその旨記載下さい。こちらよりご連絡申し上げます。
- ④ ウェブサイトに関するご意見；返信にして、ご意見を記載ください。